

内モンゴル牧民に関する「遊牧」論的比較考察

尾崎孝宏

●はじめに

小論の目的は、モンゴルをはじめとする移動性の高い牧畜社会に関してほとんど何の疑念も無く使われている「遊牧」「Nomadism」「Mobile Pastoralism」という一連の用語群について、その概念規定が内包する問題点を、現在中華人民共和国内モンゴル自治区の牧民社会で発生しつつある現象との対比より明らかにし、今後の牧畜研究において有効と思われる新たな研究視角を提起することである。

従来、モンゴル牧民社会を形容する表現として「遊牧」「Nomadism」という用語を用いることは何ら奇異でもなく、むしろ別の用語でモンゴル牧民社会を形容しようという発想が思い浮かばないほどに、両者の結びつきは深いと言っても過言ではない。なお、語義のレベルにおいて、日本語および漢語の「遊牧」は移動を意味する「遊」と牧畜を意味する「牧」の造語である以上、本来的に「移動牧畜」を意味する言葉であるのに対し、英語の「Nomadism」はそもそも移動生活の意味しかもっていない言葉である、という差異が存在することは事実である。しかし、ハンフリーらはモンゴル牧民の移動性の変化を論じた著書『The End of Nomadism?』で「Nomadism」を「Mobile Pastoralism」と定義している（Humphrey & Sneath 1999: 1）。つまり、「Nomadism」という概念を日本語や漢語の「遊牧」と同義の概念として位置付けており、少なくともモンゴル牧民社会を論じる限りにおいて、英語の「Nomadism」は「遊牧」と訳しても意味上の差異が存在しないのが現状である。

さて、それではこうした「遊牧」イメージの構成要素は何だろうか。実は、これに関しては研究者も、また自らを「遊牧民（ヌーデルチン⁽¹⁾）」であると

認識しているモンゴル牧民も明確な定義を持っているわけではない。これはむしろ、「遊牧民」とそれ以外の境界が人々によって自明であると考えられている結果であると理解しうるが、ハンフリーをはじめとする研究者およびモンゴル牧民の語りの内容より、以下のような点を構成要素として指摘しうる。

- A) ゲル、つまり可動住居に居住していること。
- B) 牧地に、少なくとも可視的である明確な境界が存在しないこと。
- C) 季節移動を、理想的には春夏秋冬の年4回行う。
- D) ホトアイル（営地集団）を構成する世帯の流動により労働力の適正配分を行う。

つまり、突き詰めて言えば空間的な移動が可能であり、かつ実際移動を行うこと、そして移動可能性の帰結として、生業に関わる社会関係も流動的である、ということである。こうした「遊牧」モデルの典型は、現在モンゴル国で行われている牧畜のスタイルに見出すことが可能である。以下では、筆者がフィールドとしているモンゴル国スフバートル県オンゴン＝ソムの事例を挙げて簡単に説明する。

まず、写真1はオンゴン＝ソムにおける冬営地の一例である。居住用のゲル3つと倉庫用のゲル1つ、石造りで屋根の無い家畜囲いで構成されている。写真2は同一集団の夏営地であるが固定的な家畜囲いは無く、また集団を2分割しているために、ここではゲル2つのみで構成されている。この事例においては、夏・冬営地間の距離は30kmほどであり、いずれの牧地にも可視的な境界線は存在しない。なお、彼らの季節移動を図化すると図1のようになる。各営地名の背景色の濃さは年毎の場所の不確定性と比例しており、色が濃いほど不確定性が高い。最も色の濃い「オトル」は、秋季に家畜を肥育する目的で行われる、基本的に群れと牧夫のみが短期間の移動を繰り返す牧畜の形態である。なお、移動距離についてはオンゴン＝ソム内でも地域による差異が大きい（尾

崎 1999 : 64-65, 2001a : 20)。

●遊牧の終焉？

さて、このような移動を明確な特徴とする遊牧の形態が現在終焉へ向かいつつある、とする言説は、まさにタイトルそのものであるハンフリーの『The End of Nomadism?』を筆頭に、別段珍しいものでもない。これは特に、モンゴル国以外のモンゴル族居住地域、つまりロシアのブリヤート共和国および中国の内モンゴル自治区の現状に関する言説であり、端的に言ってしまえば上述の「遊牧」の特徴である移動性および社会的流動性が定住化によって損なわれてしまう、という類のものである。

そもそも社会主義時代の発展ビジョンが固定建築群からなる集落的な居住地域と労働の場である牧地を分離しようとしたものであったことは、それが徹底的に遂行されたブリヤートおよび、それをモデルとしつつも必ずしも完全に成功したとは言えないモンゴル人民共和国（当時）のネグデル化においてすら見出せる事象である。ただし、本論で議論する中華人民共和国においてはむしろ、集団化を放棄した1980年代以降の「改革開放」の発展ビジョンで言及される「定居放牧」という概念が、以下のようなディテールの違いが存在するとはいえ、遊牧を終焉へと向かわせる理論的裏付けとなっているといえる。ここで細かい議論は避けるが、「定居放牧」とは大まかに言って、固定家屋に住み季節移動を行わず、あまり広くない牧地で放牧を行う牧畜のスタイルである（Cf. 稲村・尾崎 1996 : 65-77, 尾崎 2000 : 47-53）。

より具体的には、1980年代に中華人民共和国全土で展開された改革開放政策に伴い生産責任制が導入されていくが、内モンゴル自治区の牧畜地域においては、それは家畜と牧地の世帯レベルへの分配という表現形を取った。以下に、内モンゴルで行われた家畜と土地の分配とそれに伴う居住形態の変化の一例を示しておく。

事例1：シリングル盟シリンホト市アラシャンボラグ＝ソム（U氏，1999年秋調査）

1983年に家畜を分配した。ガチャから1人あたり何頭，という要領で分配され，U氏の世帯は100頭の小家畜（ヒツジ・ヤギ）を分配された。なお，調査当時の所有家畜数は小家畜700頭およびウシ50頭，ウマ数頭であり，ウマに関しては親しい友人に預託していた。

1991年に牧地を分配した。土地も1人当たり約2,900ムー（約200ha）という分配方法で，この世帯は14,490ムー（約1,000ha）の土地を得た。現在，2,000ムー（約130ha）を有刺鉄線で囲い込んである。土地は2塊に分かれており，春～秋の営地と冬営地になっている。両者の距離は10kmほどであるが，冬営地の放牧は現地に住み込んでいる傭人が担当し，U氏は春～秋営地にある固定家屋から日帰りで牧地まで通い，群れをチェックしている。なお，固定家屋は牧地を分配した1991年に建築したものであり，それ以前はゲル居住だった（尾崎 2001b：118－119）。

事例2：アラシャン盟エチナ旗ダランフブ鎮（Ba氏，2002年春調査）

1983年に家畜と土地を分配した。小家畜120頭，ラクダ20頭が分配されたが，ラクダはガチャに返却した。というのも，当時，家には父親と妹しかいなかったため労働力が不足していた上に，分配された川の近くの土地はラクダには向かなかったため不要であると判断した。なお，調査当時の所有家畜数は小家畜300頭。

土地は1塊の土地を3,000ムー（約200ha）分配された。元々自分たち家族が住んでいた土地。その後，土地の中に6－7つの囲いを作った。現住の固定家屋は1996年に建設し，年間を通じてそこに居住している。

2001年，現地では環境保護の名目で放牧を禁止する決定が国家より出され，調査当時，全て飼料で飼養しなければならなくなっていた⁽²⁾。家畜頭数の上限は設定されていないが，自分で飼料を調達する必要性が生じている。Ba氏は

2001年、2,000斤（約1t）のボルトール（豆の一種）と車4-5台分（重量換算では約10t）の干草を購入した。その他、100ムー（約7ha）ほどの畑を所有しており、その一部でボルトールを作っている。今後は自分の畑全てで飼料作物を作る予定であった（尾崎・中村 2002:49, 52, 54, 58）。

つまり、ここで進行している現象は以下の3点に要約できるだろう。

- A) 牧地の分配により季節移動が実質不可能となった一方、家畜の商品化の進行により購入物品が増加したことで、漢族風の固定家屋を建設して居住するようになったこと。固定家屋は季節移動を行わない状況下では簡便であり⁽³⁾、物品の収納や発電機の設置に有利である上、オンドルやスチームなどの暖房設備も完備しうる。なお固定家屋の建設は1980年代より開始している⁽⁴⁾。
- B) 牧地の固定化および家畜増加による狭小化を要因とする、牧地の囲い込みの進行。ただしこのプロセスは1990年代以降開始したものである。
- C) 干草、豆類、トウモロコシなどの飼料作物の利用開始。形態としては干草の購入と、自己の牧地を畑に転用して飼料作物を栽培するタイプの2種類が存在する。こうした飼料作物の利用が何時まで遡るのか、明確なデータは存在しないが、少なくとも自己栽培に関しては現在進行中の事象である⁽⁵⁾。

また、景観的には写真3から写真10までの施設・装置を上述の現象の証左として挙げておきたい。そしてここから、内モンゴル自治区における「遊牧の終焉」後の景観を次のようなモデルとして抽出することができるだろう。すなわち、図2のように、あまり広くない牧地を有刺鉄線で囲い、その中にレンガ造りの固定家屋と家畜囲いが建設されており、敷地内に牧草を栽培する畑を併設し、さらに不足する飼料は外部からの購入による、という牧畜のスタイルである。

● 遊牧（の終焉）論の限界？

上述のような牧畜は一見、かつてのゲル居住による移動牧畜とは根本的に異なったスタイルであるように思える。つまり、「遊牧」が終焉して「定居放牧」へと変化する、という図式を体現しているかのようである。しかし、事例1は家畜所有者こそ移動してはいないものの、畜群や放牧を担当する傭人は移動しているとみなす事が可能である。そして内モンゴル自治区における現実には、事例1のような「遊牧」とも「定居放牧」とも断言しがたい中間的な事例が理念形どおりの「定居放牧」を上回る多数派なのである。以下に、そうした中間的な事例を列挙する。

事例3：シリングル盟東スニト旗チャントシル＝ソム（N氏，1999年調査）

牧地は1984-5年頃に一応分けることになったのだが、1998年に正式に分配され、彼の牧地16,500ムー（約1,100ha）のうち、10,000ムー（約700ha）を既に有刺鉄線で囲った。

ただし、小家畜は通常自分の牧地ではなく、近隣に住む「羊飼いの世帯（ホニニイ＝アイル）」に金を払って預託している。調査当時、自分の牧地には近々売却予定の60-70頭のみを留めるのみであった。また、ウシも1998年には他人に預けた。N氏は、家畜頭数が多く牧地が不足している豊かな世帯が、広い牧地を持っているが家畜頭数は少ない貧しい世帯に自らの家畜を預ければ、前者にとっては牧地にかかる負担が減り、後者にとっては家畜預託の手数料で収入が得られるため、双方にとって利益があり、傭人を雇うよりも合理的であるとの認識であった（尾崎 2001b：123-124）。

事例4：シリングル盟アバガ旗ボグドオーラ＝ソム（M氏，2001年調査⁶⁾）

牧地の分配は80年代に行われたが、四季それぞれ別の場所に牧地を割り当てられたため、四季の牧地を移動可能である。また、牧地は世帯ごとに分配され

たが、夏営地のみは有刺鉄線で囲っておらず、親族10世帯ほどで共同利用している。ただし、放牧は世帯ごとに行い、共同放牧は行わない。

春営地に固定家屋があるが、夏営地はゲル住まい。母のゲル、妹のゲルが1-2kmの距離に存在するため、密集しているという印象を受けるが、生活はそれぞれ独立している。調査年度は干ばつがひどく、ウシとウマは春営地に留めてある。小家畜は南にある友人（牧民）の土地3,000ムー（約200ha）を借りてオトルに出す予定であった。オトルには雇用している四子王旗の傭人1名のみがゲルを携行して赴き、M氏の家族は本人の夏営地に留まる、とのことであった。

事例5：シリングル盟アバガ旗ボグドオーラ＝ソム（T氏，2001年調査）

T氏はM氏とは異なるガチャに属するが、牧地の分配方式は同様である。T氏は春営地に建てたレンガ造りの固定家屋に通年居住している。40頭ほどのウシも通年で春営地に留めているが、小家畜500頭は調査当時、6.5km南西の夏営地で放牧していた。夏営地にはT氏の娘夫婦と臨時に雇った傭人1名がゲル居住しており、T氏は時折バイクで見て回る程度である。小家畜の群れはT氏所有分と婿の所有分を1群にまとめて、婿が管理している。春になれば婿もT氏と同じ春営地に居住する、とのことであった。

事例6：シリングル盟アバガ旗ボグドオーラ＝ソム（Bi氏，2001年調査）

調査当時、Bi氏は夏営地の草生が不良のため春営地に留まっていた。東約1kmにBi氏の生家でもある兄の固定家屋があるが、Bi氏はゲル居住。牧地は1980年代に分配され、彼の牧地は四季分の合計で8,000ムー（約550ha）。Bi氏は事例5のT氏の姻族であり、彼の夏営地はT氏らのすぐ北側に位置しているという。

事例7：アラシャン盟エチナ旗サイハントーライ＝ソム（Bu氏，2002年調査）

冬営地はガチャ中心地，夏営地はそこから3 km 離れた地点にあり，いずれも固定家屋がある。冬営地の固定家屋は1980年，夏営地の固定家屋は1985年に建設し，夏営地は6-10月まで居住する。現有の家畜はヤギ120頭，ヒツジ30頭，ラクダ12頭，ロバ1頭だが，1960年代にはウシやウマも存在した。当時も冬営地と夏営地の区別はあったが，現在同様，距離は近かった（尾崎・中村2002：48，5153-54，61）。

本論文で取り上げた7事例より容易に看取できるのは，人（家畜所有者）も家畜も通年で同一個所に留まる典型的な「非移動」は事例2のみであり，人は固定家屋に居住して非移動であるが畜群は移動している事例（事例1，事例3，事例5），人が複数の固定家屋を所有しており人も畜群も移動している事例（事例7），人もゲルを併用して移動するが畜群は人以上に移動している事例（事例4），人はゲル居住だが自然条件に応じて移動しない事例（事例6）など，人と畜群の移動に関して多様なバリエーションが見出せることである。また，一口に畜群と言っても，事例4における移動する小家畜と移動しない大家畜のコントラストのように，同一家畜所有者が畜種に応じて別個の移動パターンを採用することすらある。こうした事実は，従来の「遊牧（の終焉）」論の限界を次のように逆照射する。

- A) 従来の「遊牧」概念では，人の（季節）移動と畜群の移動をア priori に同一視してきた。これは逆に，人の移動と畜群の移動が分離している場合や，畜群の一部のみが移動する場合をカバーしきれないことを示している。
- B) 従来の「遊牧」概念は，移動と非移動を完全に別の事象として想定しているがゆえ，両者の境界は自明のものとして処理されてきた。そのため，日帰り放牧でも到達可能な距離を「移動」しているケース⁽⁷⁾や草の状態により夏営地へ移動したり春営地へ留まったりするケースなど，内モンゴルで見出せる真に境界的な事例に対しては，却って有効な分析視角を提供し得

ない。というのも、内モンゴルでは移動と非移動は何に注目し、どこを閾値とするかによって異なるためである。

C) 従来の「遊牧」概念では、移動は第一義的に可動住居を持った季節移動を想定してきた。これは、すでに指摘した人と畜群の独立した移動や、あるいは傭人としての移動（移住）のような事例が頻発する内モンゴルの移動の実態を分析するには不十分な概念設定である。

要するに、現在内モンゴルで起こっている変化を単純に「脱遊牧」（あるいは遊牧の終焉）と呼べば、その概念が有する過剰なまでのイメージ喚起力により却ってその現実を見えにくくする、つまり現存する移動性すら隠蔽してしまう結果に陥る可能性が高いのである。より正確な表現をすれば、現在内モンゴルで生じている現象は、主に牧地を世帯ごとに分配したことの帰結としての「脱可動住居」つまり固定家屋化である。これは既に見たように、あらゆる移動性が無に帰することを意味していない。むしろ居住形態の変化を実態以上に過大視してしまう、定住者のメンタリティとでも呼ぶべき認識のあり方がここでは問題となりうるのである。

● 補足的な考察

既に論じたような事実より、現在、内モンゴルにおける牧畜のバリエーションを住居の変動と畜群の拠点変動の有無によって分類すると図3のようになる。つまり、ここでは住居の変動も畜群の拠点変動も存在するタイプとして従来型の「遊牧」および固定住居間の年間移動（Cf. 事例7）、住居の変動はないが畜群の拠点変動が存在するタイプとしてオトルおよび傭人を使用する牧畜（Cf. 事例1）、住居の変動は存在するが畜群の拠点変動がないタイプとして傭人としての単身での出稼ぎおよび春営地などへの畜群の放置（Cf. 事例4）、住居の変動も畜群の拠点変動もないタイプとして「定居放牧」およびその極限形で

ある舎飼い（Cf. 事例2）の4通りに分類が可能である。あるいは、これをさらに細分し、住居の変動と畜群の拠点変動がリンクしているタイプと独立して行われているタイプ等を設定すればより現実に近いモデルを構築しうる可能性もあるが、ここでは煩雑になるため敢えて細かい点には立ち入らないことにしたい。要は、単に移動といってもそれは全般的に存在か不在かを二元論的に論じうる現象なのではなく、多様なファクターからの考察が不可欠である、という点が重要なのである。

ただし、ここで次のような素朴な疑問に対する反論が必要である。つまり、現在の内モンゴルは移動が完全に終焉する移行過程に過ぎないのではないか、という疑問である。これに関して、筆者は以下の2点を指摘しておきたい。

- A) 内モンゴルの牧畜には既に多様なバリエーションが存在する。これは家畜の私有化や牧地分割のあり方、さらに地域的な諸条件が影響した結果であり、こうした現状を踏まえても「完全な移動」から「完全な非移動」への単線的な移行は不可能である。さらに過去の状況を見ても、アラシャン盟エチナ旗のように、もともと移動距離の小さい地域すら存在し、過去の「遊牧」状況すら斉一的なモデルを想像することは困難である。
- B) 行政サイドから完全な非移動を目指すような直接的な政策が出されることは少ない。アラシャン盟エチナ旗については、黄砂防止のための胡楊林保護という緊急の課題を背景とした決定であり（尾崎・中村 2002：52）、シリングル盟においては現段階でそうした指導は行われていない。また、牧民の側にも積極的に完全な非移動を目指す動きは見られない。

無論、B) で取り上げた点に関しては今後の状況次第で大幅な変更が起きる可能性も否定しがたいのは事実である。しかし、筆者は未来の予測以前に、牧畜の環境に対する可塑性を解明する必要があるのではないかと考えている。もとより、一口に「モンゴルの牧畜」と言っても、そのあり方には地域的なバリ

エーションが存在する。これはそれぞれの地域における自然・社会環境への牧畜の適応結果であると仮定しうるが、ともすれば「遊牧」論は、こうした地域的差異を一律に「移動牧畜」と見なすことでバリエーションの存在を忘却させる効果があることは既に見たとおりである。また、本論で論じたように、従来の「遊牧」論における移動観は極めて不備が多い。こうした問題の多い視角から得られる結論の信憑性について、我々は慎重である必要があるのではなからうか。

最後に、今後の牧畜研究に有効であると思われる研究視角を、本論における内モンゴル牧民の現状分析から得られた結果よりいくつか提起したい。

- A) 移動主体の分化：本論で既に例示したように、さしあたり人の移動と畜群の移動を別個に考察することが挙げられる。また、人の移動に関しては住居レベルでの移動と個人レベルでの移動に細分可能である。
- B) 移動主体相互の関係性の理解：そもそも、移動主体相互にいかなる関係性が存在し、またそれぞれの移動の動機や機能が牧民にとってどう理解・説明され、また部外者としての研究者がどう解釈しうるのかを明確にする必要がある。
- C) 移動の数量的把握：移動を従来のような「有無」のレベル、つまり質的な差異として把握するのではなく、多かれ少なかれ移動する各主体の移動を数量的に把握する。移動を計測するタイムスパンとしては、日移動・年移動・ライフサイクルにおける移動などが考えられる。また、個別的なデータに依拠した「移動誌」を作成することで、ある社会における移動の総体的理解が可能になるとともに、異なる社会における移動の様相との比較が可能になると期待される。

こうした研究視角は、究極的には「移動民」「定住民」という概念設定の見直しに繋がっていくものと思われる。当然のことであるが、人は多かれ少なか

れ、移動しなければ生活不可能である。こうした自明の事実を再認識することで、住居の変動の有無を絶対的なメルクマールとする従来の概念設定から自由な、牧畜研究という生業研究の枠組みすら超えた「移動研究」という、文化人類学の新たな1ジャンルの可能性すら展望することが可能ではないだろうか。

本論文は、筆者が日本民族学会第36回研究大会で行った口頭発表「内モンゴル牧民に関する『遊牧』論的比較考察——シリンドル盟とアラシャン盟の事例より」（2002年6月2日、金沢大学）を加筆修正したものである。

注

- (1) モンゴル語の「ヌーデルチン」は正確には「移動民」つまり「Nomad」と訳すべき用語であるが、モンゴルの文脈において移動民は移動牧畜民以外に存在しないという社会的合意が存在するため、本論では「遊牧民」という訳語をあてた。
- (2) ただし実際には、ガチャ党書記という立場ゆえか、決定を遵守している Ba 氏の方が珍しい部類に属する。
- (3) かつてシリンドル盟西ウジウムチン旗のあるインフォーマントは、ゲルは3-4年に一度はフェルトを交換する必要があり、移動しない分には面倒であると語っていた（尾崎 2000: 57）。
- (4) 例えばシリンドル盟アバガ旗デルゲル＝ソムでは、1986年に固定家屋が建設された事例がある（尾崎 2000: 59）。
- (5) シリンドル盟でも後述する事例3のN氏が、1999年当時0.5haほどの畑で飼料作物を栽培しており、今後拡大する予定であると語っていた事例がある（尾崎 2001b: 125）
- (6) 事例4から事例6のデータを収集した調査は2001年8月24日～30日の間、筆者がシリンドル盟アバガ旗西部で行ったものであるが、単独での調査報告は発表されていない。
- (7) アラシャン盟エチナ旗には、夏営地と冬営地の距離が1.5kmという事例すら存在した（尾崎・中村 2002: 49）

参 考 文 献

Humphrey, C. & Sneath, D.

1999 *The End of Nomadism?*. Duke Univ. Press.

稲村哲也・尾崎孝宏

1996 「『中国内蒙古自治区における環境と人口』調査報告——漢族移住、生産様式の変化と環境問題——」『リトルワールド研究報告』13: 57-99。

尾崎孝宏 1999 「『現代モンゴル牧民社会の基層的単位に関する研究——スフバートル県オンゴン＝

ソムの事例】調査報告」『日本モンゴル学会紀要』29 : 61-79。

2000 「牧地の分割と定住化——南モンゴル，シリングル盟の事例」『鹿大史学』47 : 45-66。

2001a 「モンゴル牧民の移動ルート選定の安定性——モンゴル国スフバートル県の事例——」『鹿大史学』48 : 1-28。

2001b 「南モンゴルにおける人口流動と家畜流動——シリングル盟の事例」『人文学科論集』54 : 115-137。

尾崎孝宏・中村知子

2002 「エチナ牧畜調査報告」『人文学科論集』55 : 45-90。

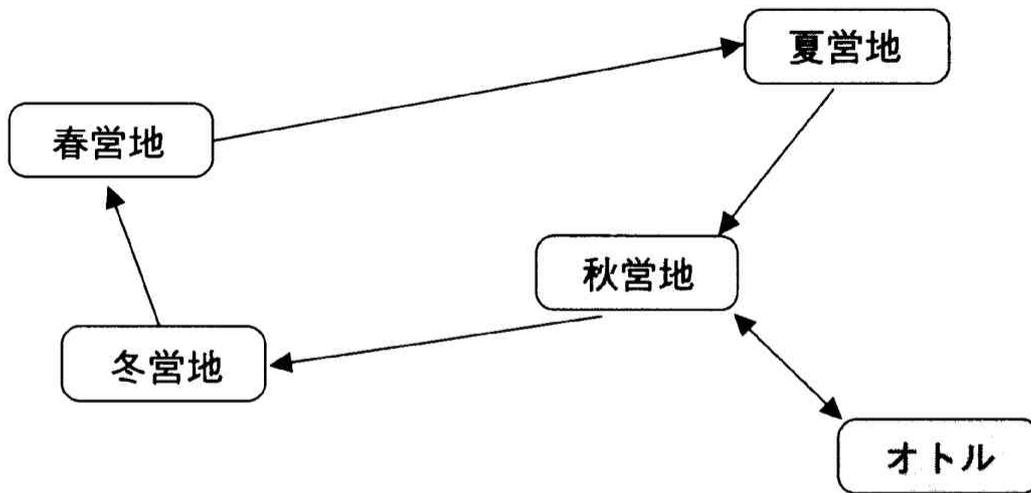


図1 季節移動の概念図（モンゴル国オンゴン＝ソムの事例より）
移動距離：10～90km/年

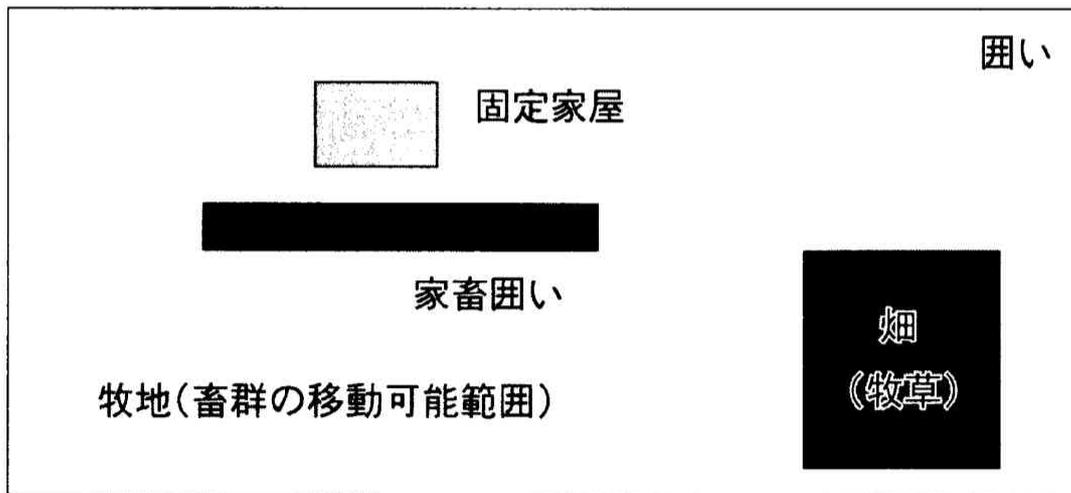


図2 「終焉」後の景観

- ・あまり広くない牧地，有刺鉄線の囲い
- ・レンガ造りの固定家屋
- ・世帯ごとの牧地の中でのみ飼養

	畜群の移動あり	畜群の移動なし
住居の移動あり	「遊牧」・「固定住居間の移動	雇用者としての出稼ぎ・群の放置
住居の移動なし	オトル・雇用者等の使用	「定住放牧」・舎飼い

図3 内モンゴルの牧畜バリエーション



写真1：冬営地（モンゴル国スフバートル県オンゴン＝ソム）



写真2：夏営地（モンゴル国スフバートル県オンゴン＝ソム）



写真3：固定家屋（シリングル盟東スニト旗チャントシル＝ソム）

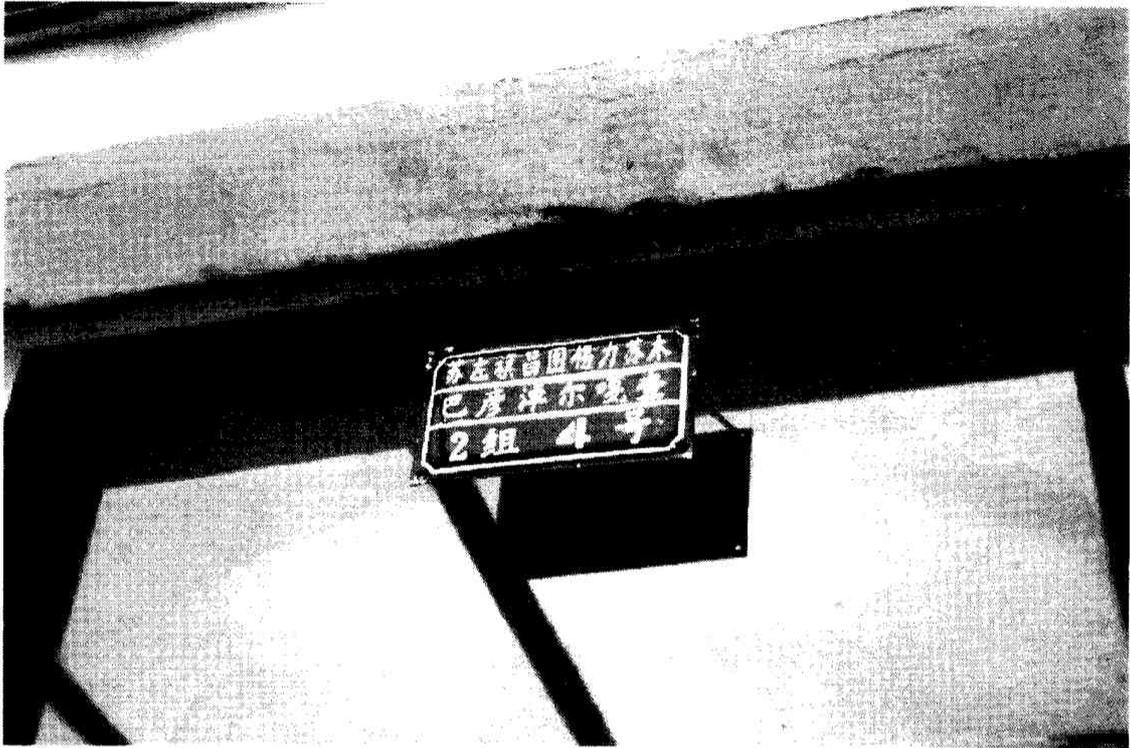


写真4：固定家屋の家屋番号（シリングル盟東スニト旗チャントシル＝ソム）

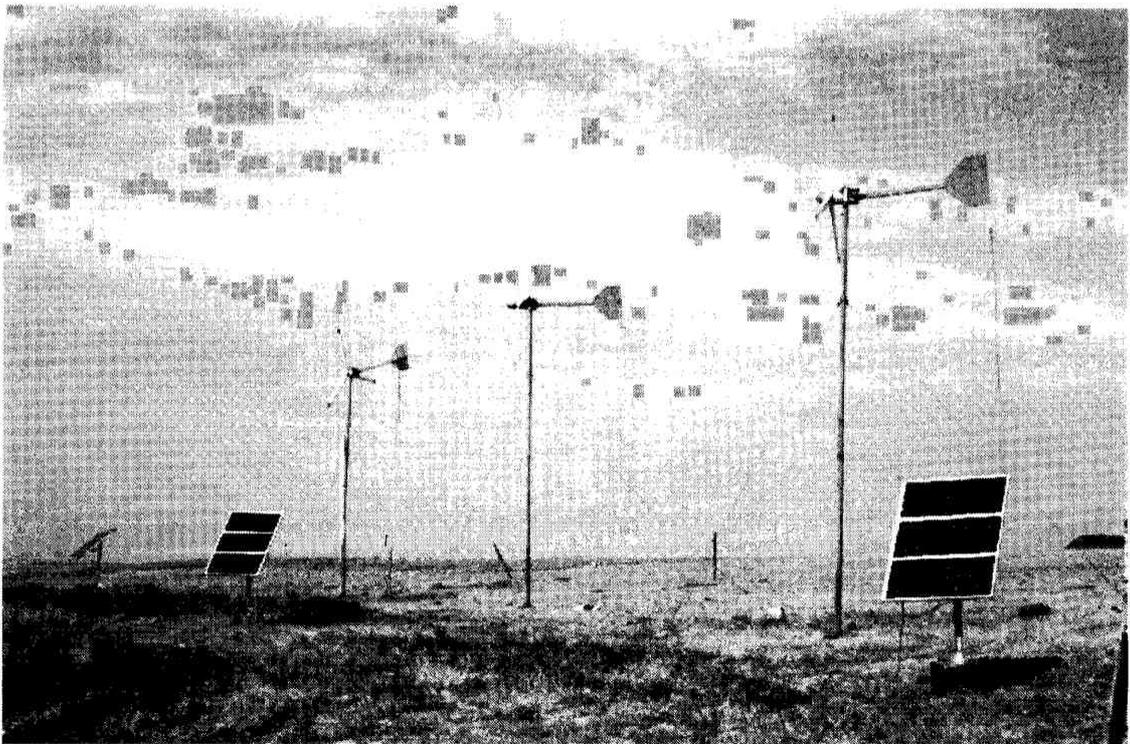


写真5：発電機（シリングル盟アバガ旗ボグドオーラ＝ソム）

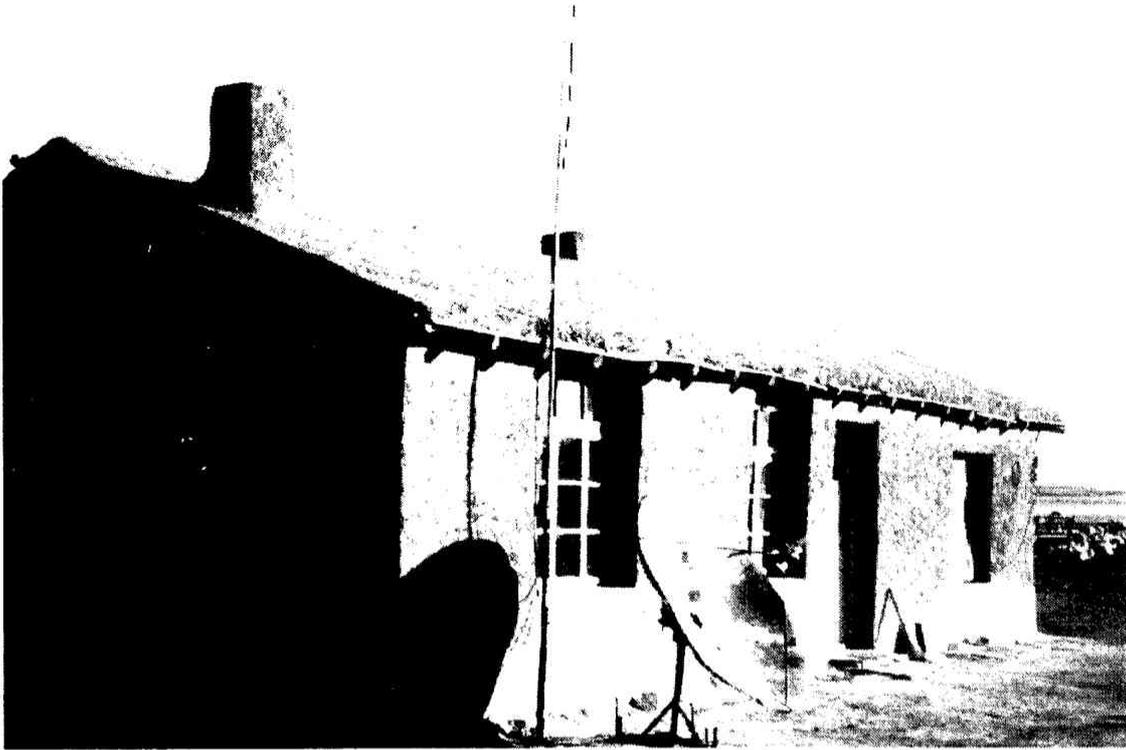


写真6：衛星放送受信用パラボラアンテナ
(シリングル盟東スニト旗チャントシル=ソム)

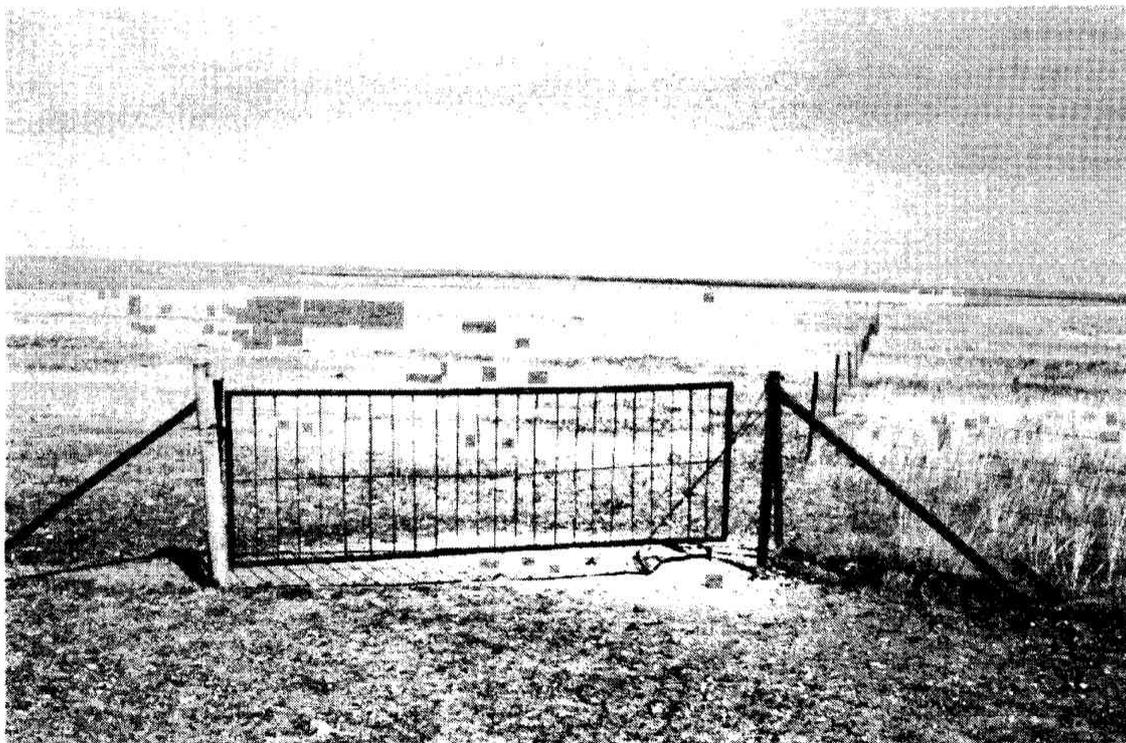


写真7：牧地囲い（シリングル盟アバガ旗ボグドオーラ=ソム）

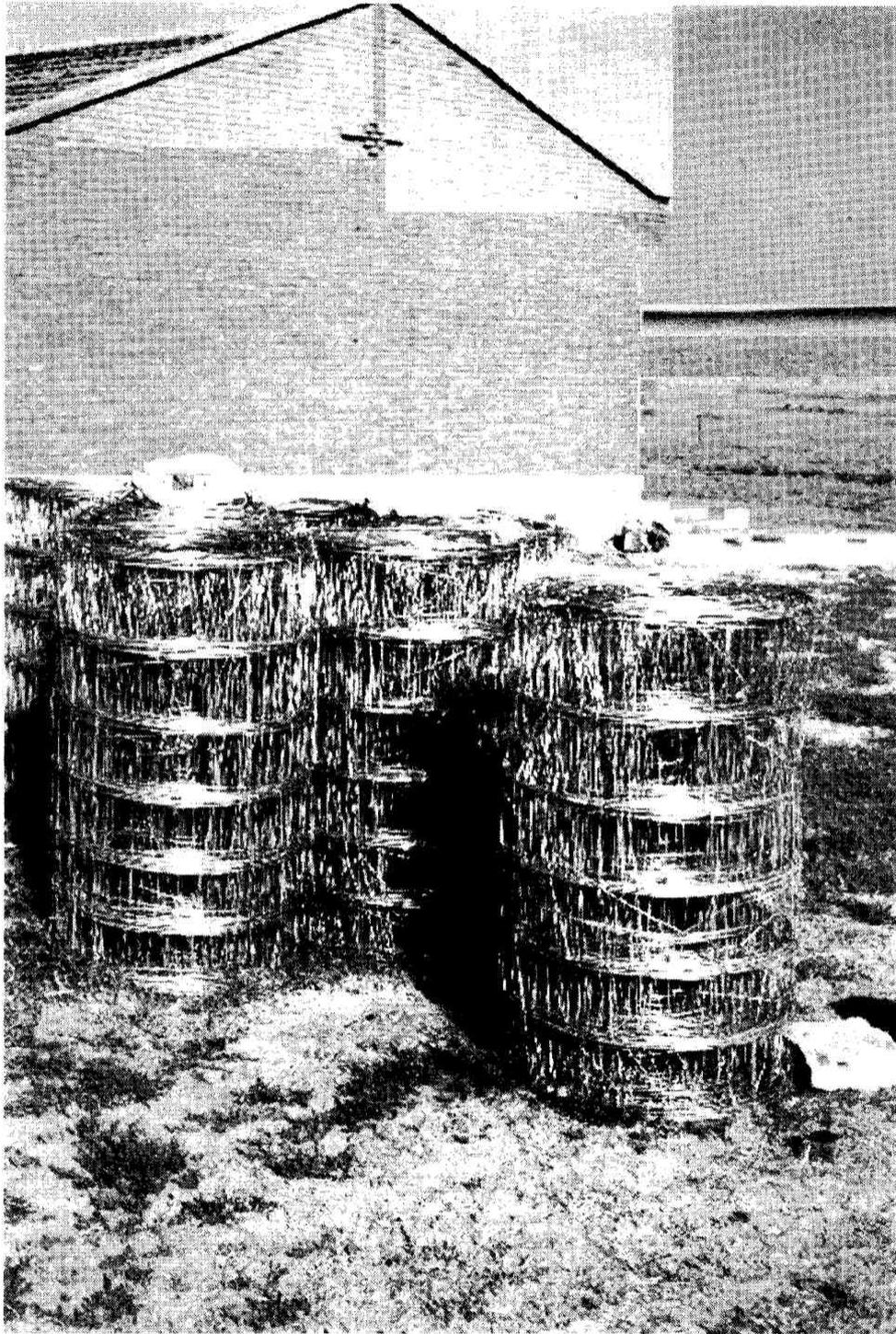


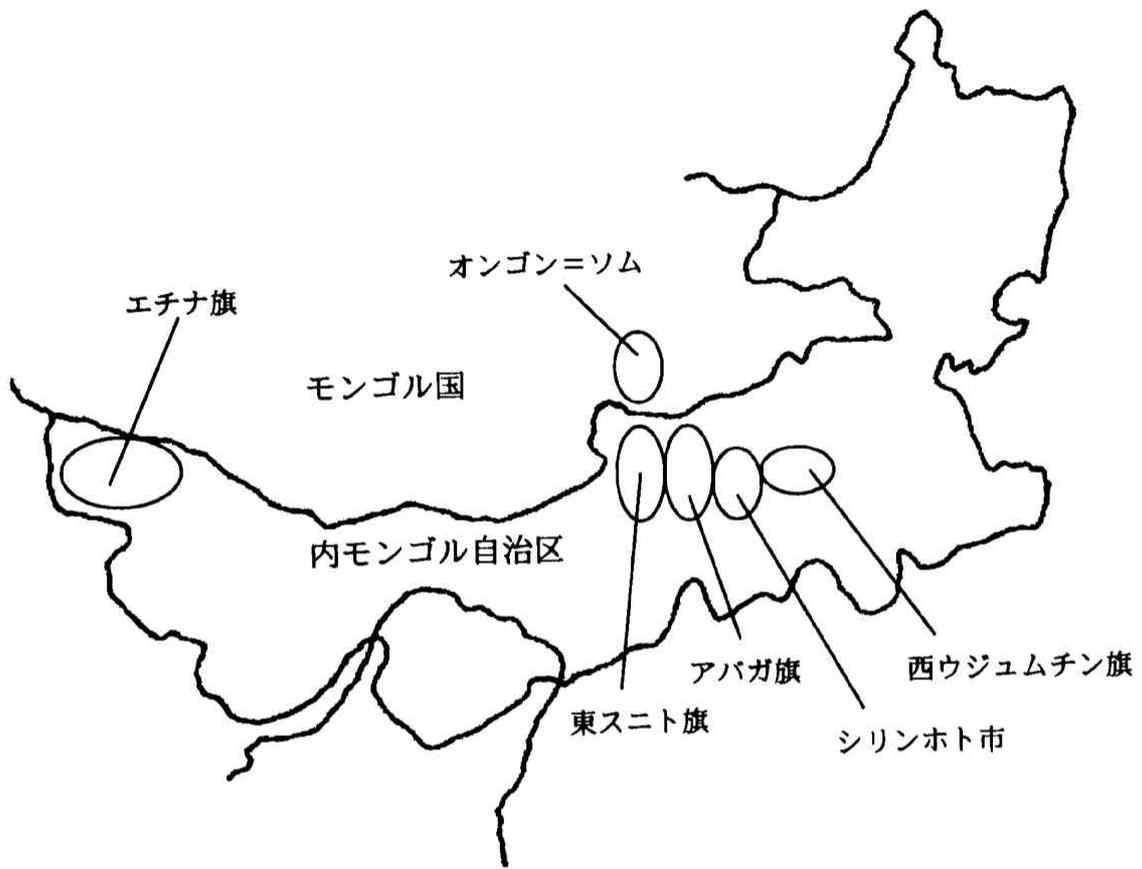
写真8：牧地囲いに使う有刺鉄線（シリングル盟アバガ旗ボグドオーラ=ソム）



写真9：越冬用の干草（シリングル盟アバガ旗ボグドオーラ＝ソム）



写真10：牧地内の飼料畑（シリングル盟アバガ旗ボグドオーラ＝ソム）



参考地図